

竹盛天雄著『明治文学の脈動—鷗外・漱石を中心に—』『學藝小品 森鷗外／稻垣達郎』——竹盛氏の方法——

相原和邦

二冊の著書は、学術論文集とエッセイという仕立ての点で、一見性格を異にするかと思われよう。けれども、よく読むと、通底しているところも多い。

共通する基本特色の第一は、著者の関心の広やかさ、対象領域の大きさである。「白描 明治文学の形成」において明治文学の流れを展望した後、逍遙・学海・鷗外・露伴・蘆花・白鳥・漱石をとりあげ、結びに「回顧録と自伝」を置いている。この多様性を取り合わせは、独得である。後者も、著者の研究の主対象をなす森鷗外についての国内・ドイツに関するエッセイと恩師稻垣達郎をめぐる文章の併置で、この組み合わせには意表をつかれるのも確かだが、そこには、対照性とともに、響き合うものがある。

特色の第二は、それが、自ずからなる中核を持つていることである。前者において、「鷗外・漱石を中心に」というサブ・タイトルにも表れているように、大半のページがこの両作家に割かれ、力を込めて論じられている。後者も、全三〇〇ページのうち、「鷗外をめぐる断章」に二二八ページがあてられている。しかも、

それが、漱石との対比によって深められるというような遠心性と求心性とを兼ね備えている。

特色の第三は、相対的目配り、相対化志向である。「逍遙と学海」「鷗外と明治」「漱石と鷗外」「謙遜と勅さ」などタイトルに見られる（と）の多用や「点頭録」にふれ（過去は「夢」のように感じられる、「無」である、という認識を語るところから筆を起こした文章が、「有」のすがたに転じると、このような社会批評・文明批評になることについて、三思すべき）（三八三頁…無印は「明治文学の脈動—鷗外・漱石を中心に—」以下同じ）といった論理展開の振幅の大きさにも、それが端的に生きている。

特色の第四は、自在な帰納法による論の組立かたである。部立て・章立てにおいても、官字アカデミズムにありがちな形式的体系にとらわれていない。論をつむぐ文体にも、自由な語り口の魅力がある。

特色の第五は、方法意識にある。「方法」の語が、頻繁に出てくる事実に加えて、〈作家という受皿を前提にしないで、創作方法や表現形式の意味を分析し、その構図を明らかにしてゆく読み方は、まだこれから〉（二つのエスキス…一九九頁）という発言をみれば、方法にこだわる著者の動機が明瞭である。

本稿では、竹盛氏のいう方法に着目してみたい。

氏は、「漱石の岸边にて」の「序章Ⅰ漱石—「読む」ということに触れつつ—」において、〈時代そのものの状況と深く交又している漱石その人の内と外とについて、包括的な追尋がなされな

ばなるまい」(二八二頁)という。これは、漱石の場合のみならず、ほぼすべての論考をつらぬいている姿勢である。そのため論の糸筋が複雑になり、単線的な序論・結論を構成しないので、人によつては箇切れが悪いと受け止められかねないが、それは、作品の味わいをするだけこぼさず、総合的に把握しようとする態度からの帰結である。氏が「文化的な複合体としての漱石作品」(一八四頁)といい、漱石の「物の両端を敲く傾向」に注目するのも、「低徊趣味」(曲線的螺旋的)手法を重視するのも、このことと重なってくる。

もとよりそれは漱石にかぎらない。「物の両端を敲かずには置かない」節蔵的思考(「鵬外の方法」一〇五頁)を指摘し、さらに「鵬外精神内部における合理・相対主義のしんけんなきがき」(二〇七頁)あるいは「官にいて、野に生きることを夢見る」この精神の運動は、鵬外をつらぬく二極性、あるいは相対主義につながるが、何よりも、彼が早くから文学活動に乗り出した根本にかかわっている(「鵬外の二極性」二一七頁)と論がすすめられるとき、それが、いかに対象の根源に竿を指す方法であるかが明らかになる。

つぎの愛用語は「場」(言葉)(語)である。

早くも、「白描 明治文学の形成」のなかに、「場」(言葉)などの文学装置の読み取りの必要が提言されている。ついで、「日記とはそんな不思議な力がはたらく「場」(四八頁)、学海の「場」の感動」(五一頁)といった用法が出てくる。後者にも、戦場における「詩を語る文人的雰囲気」(*「學藝小品 森鷗外」稻

垣達郎)以下同じ二五〇頁)としての「場」、「(征旅にある鵬外とそれを遙かに思いやる)」「(同) 近親との「場」といった具合に「場」への注視が見られる。「間」や「ずらし」あるいは「魔」への注目とともに、言語空間において文学性を形作る生態としての「脈動」を照らし出す作業といつてよい。

「言葉」(語)については、たとえば、短編「普請中」に、「日本」の語は、実に八回にわたつて使われている。場所確認のモチーフが仕掛けられていることは明らかである。「(鵬外の「寂しさ」二九三頁)としている。「こゝろ」論において、「奥さんに乃木夫人と同じ静という名をつけた」「妻」が、「別の「廻り合せ」を生かすように設定された」事実をもとに、「乃木夫妻殉死のパロディ」(二つのエスキス二九八頁)という一面を読み取っている。他にも、「事実」と「小説」の位置づけ(夢と低徊「坑夫」論二二三頁)、「進化」と「退化」(「それから」について二九一頁、「論理」の番人「魔と恩寵」「道草」について二三七六頁)など随所に用語への注目があり、それが独自の読みを引き出している。特に見逃せないのは、「上から下に伝えること」はあつても、その逆の方向のことば、特に横の関係において意志疎通をはかることばが欠如している(「初出稿「心 先生の遺書」を読む二三五頁)とする洞察である。

『彼岸過迄』における短編連鎖という方法への着目、特にその「成長的過程的」の追跡はユニークであり(二つのエスキス、「それから」における「端書と封書」の役割の意味づけ「手紙と使者」二三〇頁)も、おもしろい。

さらには「故郷」のモチーフがある。

蘆花「自然と人生」について、そこにあるのは、「仮想の故郷」に過ぎず、〈生活の場はもはやその人情や風景のなかには確保されることがない〉（疑似故郷の発見…一四三頁）とする指摘は鋭い。

また、〈死の床にいた「石見人森林太郎」の視線は、やはり、この庭から仰ぎ見る角度で、城山を追っていたにちがいない。これが、彼にとつての忘れがたい故郷という名の原風景だったのではあるまいか〉（*津和野の秋…八頁）という筆遣いは人をうなずかせ、しみじみとした思いに誘う。

このほか、都市空間に着目して〈たしかにこれは、書生社会という集合体を鏡にして、文明開化の流れそのものとして「変遷」している新しい都市の様相を、その猥雑さと活気によって写し出した文学と呼ぶこともできそうだ〉という読み取り「変化」「変遷」ということ―「当世書生氣質」をめぐって…四四頁）があり、〈否定弁証法が、旅の形態をとつた物語空間と不可分に結びついている〉（露伴における魔と表現…二二六頁）にも、空間に関する方法分析が生きている。

時間構造については、「舞姫」の物語発生にふれて、「帰国後における一年余の煮つめられた作者の歲月がこの作品の根柢を流れている現在時間である」（舞姫 六二頁）とする精密な解析がある。

〈家〉の問題にも、著者の関心は強い。なかでも、赤松登志子との結婚には〈市民的自由への見切り〉があったが、〈その代償を求めるかのように、鵬外の医学ジャーナリズム上での活潑な仕

事は、まさしく市民的自由につらなる革新的で向日的な性格を鮮明にして行つた〉（同右…五八頁）という位置づけは、鵬外の屈折と複雑さを解き明かして十全である。〈家〉の宿命と火花を散らすことによつて、近代日本の父と子の関係は普遍性を獲得する（藤村における父と子…二六六頁）という見方も示唆に富むが、〈鵬外における「母」から「父」への回帰〉は、〈近代日本の社会を浸潤している、根深い立身出世主義のコースを生きた俊秀の、自己克服の道としてつかまれたもの〉（*鵬外の父…二二頁）とする見解は、説得力に加えて、味わいがある。

さらに、方法として、偏狭なテクスト論にとらわれないメモ、日記の活用があり、そこからたとえば、〈日記や「断片」にえがかれた鏡子夫人の行蔵が、種々の面でお延描写の資料になっているといえれば言い過ぎであろうか〉（お延という女性像…三九三頁）といった興味深い観察も提出されている。

著者はまた「書く」ことの意義についても随所でふれている。とりわけ、「こゝろ」論における「書く」ということの重み「先生」が「書く」ことにこめた生涯最後の「鼓動」（初出稿「心 先生の遺書」を読む…三五五―六頁）というあたりの分析は圧巻だが、これは作中人物のみならず、作者さらには著者自身の執筆行為に対する十分な自覚に裏打ちされた結果なのである。

忘れてはならないのは、この二著の仕事がここだけで終わるものではないという事実である。主要著書に限っても、鵬外に関し

て「鵬外 その紋様」、漱石に關して「漱石 文学の端緒」とい
う、いづれも、重厚な業績がある。さらには、「介山 直哉 龍
之介——一九一〇年代 孤心と交響」に加えて、第一次・二次
『荷風全集』編集参加があり、『日本現代文学大事典』共編もあ
るといったぐあいである。

氏は稲垣達郎の《他面と豊饒》について、師自身のことを借
りながら、《蔵するところ多》い《多頭の蛇》（立派な人の仕事は

新刊紹介

山下一海著

『俳句の歴史—室町俳諧から 戦後俳句まで—』

本書は、俳諧の発生した室町期から現代に至る
俳諧・俳句の歴史を概観したものである。全体は
二十八章からなるが、さらに細かに項目にわかれ
ており、内容は俳諧・俳句についての説明、俳諧
の発生とその展開のみならず川柳の成立、さらに
近代俳句の展開、各社社の意義、戦後の俳壇にま
で多岐に渡っている。一方、芭蕉・蕪村・一茶・
子規といった著名な俳人についての記述も詳細で
あり、又、巻末には主要人物索引も付されている。
本書の意義は俳諧と俳句を一つの歴史として捉
えた点にあり、本書を通読することで現代の俳句
に至る家庭を捉えることができる。また、各項目
が詳細かつ平易なため辞書として用いることも可
能であり、さらに豊富な用例により作品への理解
を深めることもできるだろう。研究に携わる人の
みならず初心者入門書としても好著であり、一
読することをお勧めしたい。

（平11・4 朝日新聞社 一八七頁 一四〇〇円）

尾形明子著

『田山花袋というカオス』

本書は、花袋の自然主義以前の作と言える明治
三十四年の『野の花』から、死後五年を経て昭和
十年四月に出版された『白夜』までの、執筆時期
毎の花袋の像を追いつつ、彼の文学の限界、日本
自然主義文学の限界をさまざまな角度から論じて
いる。『野の花』序文と『野の花』の隔絶から従
軍経験を通して自然主義に近づく過程、「蒲田」
における自己批判・自己救済の願望の無さ、「生」
序文と「生」との間にある落差・問題提起の姿
勢の無さ、「時は過ぎゆく」の真実に見えるエゴ
イスティクな強さ・見えない部分への無関心、
「廃駅」等の作品に見える個人を取り巻く客観的
要素の無視、「愛と恋」・『白夜』から見る花袋
の愛欲など、細かな実証に拠った論が展開される。
尾形氏の作品を論じる姿勢は、第三章冒頭にある
ように、「底に享受者としての感動を持たない研
究や評論を私は認めない」というもので一貫され
ている。

（平11・2 沖積社 四六判 三四四頁 三〇〇
円）

〔島谷純子〕

磯佳和著

『伝記考証若き日の正宗白鳥 —岡山編—』

本書は、後に作家・評論家「正宗白鳥」として
六〇年弱の文学活動を展開してゆくこととなる正
宗忠夫の生涯を考証する著者の仕事のうち、「岡
山編」と題されるように出生から上京し東京専門
学校に入学する一八歳までを一冊にまとめたもの。
著者自身「正宗白鳥事典のように使ってもらえ
れば」と言うように、白鳥自身の回想はもとより
正宗家やその周辺への調査は詳細をさきめており
、「外をおそれる少年」や郷里での学校生活、キリ
スト教への接近など後年の白鳥のテクストに描か
れる自画像のための補助線となる一冊であろう。
特に同時期の言説が豊富に参照・引用されているこ
で少年期の忠夫が生きた時空が再現されており
、「正宗白鳥」の理解にとどまらず興味深い記述と
なっている。
本書の統編として「東京専門学校時代」編が予
定されており、その刊行も心待ちにされるところ
である。

（平10・9 三弥井選書 A5判 三四九頁 三
八〇〇円）

〔橋本雄介〕

大きい）（*先生の死二二三頁）と評しているが、この評言はほぼ
そのまま著者自身に返さなくてはなるまい。

『明治文学の脈動—鵬外・漱石を中心に—』（一九九・二 国書刊行会
A5判 四四四頁 四八〇〇円）

『學藝小品 森鷗外／稻垣達郎』（一九九九・二 明治書院 四六判 三
〇〇頁 三八〇〇円）